

補正予算案など可決

歳末県会閉幕

審査委の空白回避

知事「水俣病認定」で答弁

十二月定例県議会最終日の十八日は、午後零時十分から本会議を開き、特別、常任各委員長報告のあと、総額九十一億五百万円の補正予算案など五十一議案を国に出願対策を要する意見書など議案提出「議案を可決し、午後一時十五分、会期十五日間にわたった歳末県会の幕を閉じた。

本会議では採決を前に、委員長、本原稿の審査問題を取り上げ、県議会に開連して、共通の井上東、公害被害者認定審査委員の任期次議員が賛同に立った。同議員は、が来年一月三日で切れるが、審

「テッソに自主交渉を働きかけ、客観的に、傍観者にながめてい、と通り、最終日の十八日に共、理の井上議員が賛同した程度、間は残る。

再交渉を要求、その結果、四回引き上げられた。この間わずか二日間、県議会の指摘によるものだったといえ、わずか一回の交渉で、こんな簡単に値引きが実現するとはだれも予想しなかったに違いない。もし同議員会での指摘がなかったら、約一億円の税金が払われたことになる。開議公社のあり方が今後問題になる。

県議会を顧みて

不況の深まりの中で開かれた十二月定例県議会は、十八日、会期十五日間の幕を閉じた。今県議会では、中小企業対策、農村対策、さらには来年度の財政対策など、ドル・ショックに起因する当面の諸問題が論議された。しかし問題が深刻なわけには低調な県会で、問題解決の糸口さえ見いだせなかった。

財政対策に限らず、農政、中小企業対策についても論議が激戦した。深刻な問題をかかえながら、低調の印象を与えたのはこのためである。同時に、農政の遅滞

「テッソに自主交渉を働きかけ、客観的に、傍観者にながめてい、と通り、最終日の十八日に共、理の井上議員が賛同した程度、間は残る。

再交渉を要求、その結果、四回引き上げられた。この間わずか二日間、県議会の指摘によるものだったといえ、わずか一回の交渉で、こんな簡単に値引きが実現するとはだれも予想しなかったに違いない。もし同議員会での指摘がなかったら、約一億円の税金が払われたことになる。開議公社のあり方が今後問題になる。

○今県議会はこうし最後の県会だった歳末県会にふさわしく、とし一年間の反省と来年に向けた。その中で来年は、財政面からかなりきびしい年になることが強調された。この難題をどう乗り切るか、執行部、議会に課せられた責任は大きい。一つの危機感も、今回、特別職、議員の報酬が引き上げられた。この県民の期待に来年は大いにこたえてもらいたいものだ。

説得力欠く積極県政

低調だった水俣病論議

○今県議会の最大の焦点は、来年度予算の財源対策だった。た。そして財源対策として、交付税の試算による来年度は約五十億円の財源が不足する。これもドル・ショックによるものだが、この財源不足にどう対処するか、県議会の基本姿勢とその対策がたされ

○水俣病新認定患者のすわり込み。相次ぐ認定申請。水俣病の間接被害者であることが開かれた県会ではあったが、奇妙なことに水俣病問題があまり取り上げられなかった。

一方県は、今県議会も「患者認定は医療費の増大。補償と認定は完全に切り離された」と、これまでも考え方を繰り返した。しかし、県若手議員の関心は、交渉以前の段階で止まっている。県はこうした状態を、たとえ補償とは関係がなくなるとはいえ、

増額せよとの四原則について、沢田知事の見解をたした。これに対し沢田知事は、「現在、認定申請者が百三十六人も残っているの、できるだけ早く認定を決めたい。そのためには審査に空白が起きないよう万全の措置をとる」「専門的、医学的判断が必要なので、審査は無断だ」「水俣病という特殊なことから、委員の選考には慎重を期したい」「医療費、介護手当の増額については、環境庁でも検討している。県としても今後、国に働きかけていきたい」と答えた。

このため県教委は、開議公社に

論議を呼んだ特別職議員と議員が、開議公社に提出した。開議公社は、まず県議会の井上議員が「引き上げ」の根拠が薄い。引き上げに伴う予算の他、県民に与えるべきときめつけたため、井上議員が「取まんとは何だ」と抗議する場面もあった。結局、開議公社は、公害問題が反対したことで賛成多数で可決された。